修行道地經の説く安般念について

松 田 慎 也

本稿は、『修行道地經』（『修』と略）における安般念修習の説を、これを説く他の諸論書及び禪經類と比較して、その特徴を明らかにしようとするものである。比較は安般念修習を説く部分に限り、全体構成における位置付け等は考慮しないことにする。

比較に用いるものは、南方上座部の Visuddhimagga（Vis. と略）、同系統の『解脱道論』（『解』）と略、有部論書の中でこれを説くものとして『大毘婆沙論』（『婆』）と略、『雜阿毘曇心論』（『雜』）と略、『俱舍論』（『俱』）と略、『順正理論』（『順』）と略、他部派の論書として『舍利弗阿毘曇論』（『舍』）と略、瑜伽師地論（『瑜』）と略、禪經類でこれを説く『坐禪三昧經』（『坐』）と『達摩多羅禪經』（『達』）と略の十書である。

安般の語の定義 『修』は「安」（skt. : ana or asvāsa）を出息、「般」（skt. : āpana or prāṇāsa）を入息とする。これと同じ説をとるのは Vis. で、律の義疏の説として assāsa 〓 出息、

passāsa 〓 入息とする（Vis. では同時に、經の義疏は逆の説であったことを伝える）。

逆の説をとるものは『解』、有部の諸論書及び『達』で、安者入般者出（『解』）、「持來者謂入息持去者謂出息」（『婆』）、「安那者持來般那者持去」（『雜』）、「阿那者謂持息入阿波那者謂持息出」（『俱』）、「順』」、「持風來入內是故說阿那」「前出名般那」（『達』）となっている。なお、『婆』には持來〓出息、持去〓入息とする異説のあったことも伝えられる。

『舍』は「何謂共念出息入息」との間の直後に「出謂出息入謂入息」と述べる。これは一見、無意味な記述のようだが、左に照らせば『修』と同説をとるものと見ることができよう。

『瑜』と『坐』には記述がない。

両説の相違は、Vis. によれば、新生児の最初の呼吸が出息であるとするか、入息であるとするかによるとする。『修』『俱』『順』が、生時にはまず入息のあることを主張してい

るのは同様の理由によるからであろう。

四事について 『修』では修習の階梯として①数息②相随③止観④還淨の四事をあげる。数息とは出入息を数えることによつて心の乱れを除くこと、相随とは数えることをやめて心をひたすら出入息に従わせること、止観とは息の出入を初めから終わりまで観察すること、還淨とは心を鼻頭の一点にとどめて、息の出入を知ることを言う。

『解』では、先師説の四種修安般念として①算②随逐③安置④隨觀の四を説く。③安置は鼻端に心をとどめる意で、修の④還淨と同内容である。④隨觀は、安置した心において起こる心理作用を観察する意で、さらに進んだ修習である。『修』の③止観は、ここではむしろ②隨逐と③安置にまたがる内容と考えられる。

有部諸論書では、六法(『婆』)、六因縁(『雜』)、六因(『俱』)『順』として、①数②隨③止④觀⑤轉⑥淨を説く。①～③は『解』に同じである。④觀は息風の觀察からはじまつて、この息風を生起させている身体の五取蘊の觀察に及ぶ。⑤轉は、心を息風から転じて、煩惱よりの出離を思念し(『雜』)、あるいは四念処觀を修し(『婆』)、あるいはさらに世第一法に至る(『俱』)『順』を言う。⑥淨は、諸蓋を淨め(『雜』)、あるいは四善根から無學に至るまでをいい(『婆』)、あるいは見道に入るをいう(『俱』)『順』。

修行道地經の説く安般念について(松田)

『坐』『達』でも①数②隨③止④觀⑤轉觀(『達』は還)⑥清淨の六種をたて、⑤轉觀にて五蘊の無常を観察し、⑥清淨にて諸煩惱を滅して無學尽智を得ることを言う。

『瑜』では①算數修習②悟入五蘊修習③悟入緣起修習④悟入聖諦修習⑤十六勝行との五種修習を説く。このうち、⑤十六勝行は後に十六特勝の説との関連で論ず。『瑜』の説は右の諸論の説を大いに異なるように見えるが、内容的には『俱』『順』の説に近い。すなわち、①算數修習には、數・隨・止の内容が含まれており、②悟入五蘊修習は觀にあたり、③悟入緣起修習は轉にあたり、④悟入聖諦修習では見所斷の煩惱の永斷を述べる所から淨にあたりと見ることができ。

Vis. では八種の作意規定として、①ganana(數)②anubandhana(隨結)③phusana(觸)④thapana(置止)⑤sallakkhana(觀察)⑥vivatana(還滅)⑦parisuddhi(遍淨)⑧pappassana(各別觀)をたてる。このうち、①～④は有部説等の①～③とほぼ等しい。⑤～⑦は見清淨にの獲得にはじまつて智見清淨を得て聖者の位を極めていくまでのそれぞれの觀と、そこにおけるそれぞれの煩惱の滅とそれによって得られたそれぞれの清淨な果とを言う。⑧各別觀とはそれぞれにおいて滅させられた煩惱とそれによって得られた果を観察することである。

『舍』にはこの説は見られない。

なお、心を鼻端等の一点にとどめて出入息を觀察すること、城門の番人が人の出入を見張ることにとえたものが、『修』の④還淨、『坐』の③止、Vis. の③触に共通して見られる。

二瑕について『修』では出入息を数えるのに「長」と「短」との二瑕をたてる。本来、出息して「一」と数え、入息して「二」と数え、順次に「十」まで数えるべき所を、「長」とは出息し、入息しておわってはじめ「一」を数えることを言う。「短」とはその逆にまだ出息しきらないうちに「二」まで数えてしまうことを言う。

有部諸論書では①数減失②数増失③雜亂失をあげる。①数減失は『修』の「長」に、②数増失は「短」に相当する。③雜亂失とは、入を出と数えるような間違いを言うとする。しかし『婆』ではこれを有餘師の説とし、十まで数えたら再び一に戻って数えはじめるべきところを、十を越えて数えることを亂数の正説とする。

Vis. 『解』でも十を越えて数えてはならないと説く。また一方で、五以下でやめてはならないとも説くが、これは両書にのみ見られる説である。

『瑜』では、入息と出息のたびごとに一つずつ数える仕方のほかに、入出息をあわせて一とする数え方、さらには百息を一として十まで数えるやり方を勝進算数として、修習の進

展したものと説いているが、これも他に同様の説を見ない。また、十から逆に数える仕方も述べている。十六特勝について 安般念に関しては、原始經典以来、これを四念処説の中において拡張し、身受心法の各念処に四つずつの修習法を配した、所謂安般念の十六事の説が見られる。

この十六事について、筆者は南方上座部所伝のものと、漢訳の『雜阿含經』『十誦律』『摩訶僧祇律』の所伝では、内容に多少の異なる見られることはかつて論じた⁵⁾。

後に諸論書等の説と対照する必要もあるので、南方上座部所伝のものを簡略に示す。「①長く息をはくときは『長く息をはく』と知る。長く息をすうときは『長く息をすう』と知る。②短く息をはくときは『短く息をはく』と知る。短く息をすうときは……③『身体はすべてを自覚して息をはこう』と学ぶ。……すおうと学ぶ。④『身体はたらきを鎮めて……⑤『喜びを覚えつつ……⑥『快さを覚えつつ……⑦『心のはたらきを自覚して……⑧『心のはたらきを鎮めて……⑨『心というものをよく知って……⑩『心を歡喜せしめて……⑪『心を統一して……⑫『心を解脱せしめて……⑬『無常(anicca)を觀察して……⑭『離貪(viraga)を觀察して……⑮『滅(nirodha)を觀察して……⑯『捨離(patinissagga)を觀察して……すおう』と学ぶ」。

このうち⑭～⑯までに異同が見られた。すなわち『雜阿含

經』『摩訶僧祇律』では⑭断⑮無欲⑯滅となっており、『十誦律』でも⑭変壞⑮離欲⑯離尽となっており、いずれも南方上座部伝の⑬無常と⑭離貪の間に「断」及至「変壞」が挿入され、⑭⑮が⑬⑯に繰り下り、⑯捨離が省かれている。なお、『変壞』は「断」と原語において同じであろう。

本稿で取り上げた論書のうち、南方上座部の系統であると『解』は、当然のことながら前者の説によっている。

さて『修』では、これを「十六特勝」として、次のように述べる。「①数息長則知②息短亦知③息動身即知④息和釈即知⑤遭喜悅則知⑥遇安則知⑦心所趣即知⑧心柔順則知⑨心所覺即知⑩心歡喜即知⑪心伏即知⑫心解脫即知⑬見無常則知⑭若無欲則知⑮觀寂然即知⑯見道趣即知」。⑩道趣の原語には問題がないではないが、⑭⑮の順序から見れば、明らかに南方上座部と同系統の説であろう。

『修』と非常に近いと考えられるのが『舎』である。『舎』では、『①出息長知出息長。出息長知入息長②出息短知出息短。入息短……③学一切身覺……④覺除身行……⑤学喜……⑥学業……⑦学心行……⑧学除心行……⑨学心……⑩学悦心……⑪学定心……⑫学解脫心……⑬学無常觀……⑭学離欲觀……⑮学滅觀……⑯学出世觀……』となつている。⑯出世は『修』の⑯道趣と原語が同一である可能性が高い。次に、これらと関連があると考えられるのが『坐』の説く

修行道地經の説く安般念について（松 田）

「十六分」である。本文の何をもちて十六分のそれぞれに当てればよいか明了でない点もあるので、付した番号はあくまで仮のものである。「①初入息分六種安那般那行。出息分亦如是②③一心念息入出若長若短……④念諸息遍身……⑤除諸身行……⑥受喜……⑦受業……⑧受諸心行……⑨心作喜……⑩心作猥……⑪心作解脫……⑫觀無常……⑬觀有為法出散……⑭觀離欲結……⑮觀尽……⑯觀棄捨……」。①初入息分云々を果たして十六分に数えていいものか疑わしいが、これを加えないと十六に足りなくなるので入れてある。他の論書の如くならば、⑧と⑨の間に「除諸心行」「学心」の二支がなければならぬはずだが、欠けている。⑬觀有為法出散の「出散」は、漢訳諸律や雜阿含伝の「變壞」や「断」に相当する語と考えられる。⑯觀棄捨の「棄捨」は明らかに *paṭisaṅga* に対応する。すると『坐』は、南方上座部伝と漢訳諸律、雜阿含伝の両者をとり込んだ形になっていると考えてよいかもしれない。両者をとり込むことによって当初の十六分が乱れ、その過程で当初の⑧⑨が脱落したり、新たに①が加えられたものと考えられることも可能である。

次に漢訳諸律、雜阿含の所伝に合致しているのは『瑜』の「十六勝行」の説である。すなわち、「①②於念入息我今能学念於入息。於念出息我今能学於出息。若長若短③於覺了遍身……④於息除身行……⑤於覺了喜……⑥於覺了業……⑦覺了

心行……⑧於息除心行……⑨於覺了心……⑩於喜悅心……⑪於制特心……⑫於解脫心……⑬於無常隨觀……⑭於斷隨觀……⑮於離欲隨觀……⑯於滅隨觀……」。

さて、有部論書のうち、これを伝えるのは『婆』と『順』である。『十誦律』は有部の律藏であるし、『雜阿含經』も有部所伝とされることから考えれば、これらと相違のあつてはならないはずであるが、実は①②が入れ替つている。『婆』では「如契經說仏告苾芻……①我已念短入出息了知我已念短入出息②我已念長入出息……」等とするし、また『順』でも「十六種殊勝行相」として、「經說……①短入出息②長③覺遍身……」等と説いている。『婆』では經を引いた後、十六のそれぞれを説明するに先立つて、わざわざ「入出息は短いのを先とし、長いのを後とするのか。それとも長いのを先とし、短いのを後とするのか」という問いをたて、『施設論』⁸⁾を引いて、「禪定に入るはじめは息が速疾であるが、入定して時が経てば息は安住する。それは重荷を担つて険しい所を通る時の息は速疾であるが、やがて平らな道にかかれば、息が安住するようなものである」を根拠に、入出息ははじめは短く、後に長いのであるとしている。『婆』でこのような注釈がされた背景には、順序が逆ではないかとする有力な異論の存在が考えられる。『順』では特に何の注釈も加えていないが、『順』の時代には、經中の順序について、少なくとも

有部論師の間では異論がなくなつていたからであらう。まとめ以上上の点から『修行道地經』の説く安般念修習の説の特徴を列記すると

1 十六特勝の説において、『修行道地經』は南方上座部伝『舍利仏阿毘曇論』の説と類似し、漢訳諸律、雜阿含の説とは相違する。

2 四事の説において、六因等を説く有部諸論書『瑜伽師地論』、他の禪經類や八種の作意規定を置く Visuddhimagga に比べ、發達段階が未熟である。同じく四種の説を説く『解脫道論』に比べても前段階にあるように考えられる。

3 安般の語義の解釈において、Visuddhimagga、『舍利弗阿毘曇論』と説を同じく他論書と説を異にする。

4 四事中の還淨において見られる「守門者」のたとえが、Visuddhimagga、『坐禪三昧經』の該当箇所にも認められる。

付随して注目されることは、

5 『坐禪三昧經』の説く「十六分」には混乱が認められ、南方上座部系の説と漢訳諸律・雜阿含所伝の説とが折衷されたためではないかと考えられる。

6 『大毘婆沙論』『順正理論』の説く「十六種殊勝行相」の説は、他の諸論書の説と比べて、最初の二支の順序が

逆転しており、「息短」「息長」の順になっている。

- 1 『修行道地経』卷二三(大正一五・二一五c~二一六c)。
- 2 該当箇所はそれぞれ、Visuddhimagga(H. O. S. 本) VIII:§ 145~244、『解脱道論』卷七(大正三三・四二九c~四三二c)、『大毘婆沙論』卷二六(大正二七・一三二a~一三七a)、『雜阿毘曇心論』卷八(大正二八・九三四a~b)、『俱舍論』卷二三(大正二九・一一八a~b)、『順正理論』卷六十(大正二九・六七二c~六七五a)、『舍利弗阿毘曇論』卷二八~二九(大正三〇・四三〇c~四三二b)、『坐禪三昧經』卷上(大正一五・二七三a~二七六a)、『達摩多羅禪經』卷上(大正一五・三〇一c~三〇二b、三〇五b~三〇七c)。³ Vis. VIII:§ 164。⁴ 『順正理論』では次のように述べる。「諸有情処胎卵位 先於臍処業生風起 穿身成穴如藕根莖 最初有風入身内」(大正二九・六七三a)、『達摩多羅禪經』も類似のことを述べているが(大正一五・三〇六b~c)、『言わんとする意味がよく理解できない。』⁵ 拙稿「初期仏教における呼吸法の展開―安般念について」(『仏教学』第一五号 昭和五八年)。⁶ 『解脱道論』では、最初の経からの引用部において第九支「知心我入息」が脱落している(大正三三・四三〇a)。⁸ 現存の漢訳『施設論』にはない。

〈キーワード〉 修行道地経、安般念

(上越教育大学助教授)

寄附について

昭和六十一年三月、『漢訳対照梵和大辞典・増補改訂版』(昭和五十四年八月、鈴木学術財団編集・刊行、講談社発売)が、最終刊行責任者である財団法人鈴木学術財団文化委員会(委員長 長尾雅人)の許諾を得て、縮刷され、「新装版」として、講談社から刊行された。

この「新装版」の刊行から生じた印税
第三回分 金三十七万九千四百円也

が、鈴木学術財団と最もゆかりのある財団法人松ケ岡文庫(文庫長古田紹欽)に委託され、去る昭和六十三年十二月十三日、同財団文化委員と関係の深い当日本印度学仏教学会に、その学会賞の基金の一部として寄附された。鈴木学術財団文化委員会の御好意に対し、ここに記して心から謝意を表する次第である。

平成元年一月十五日

理事長 平川 彰